

児童期青年期の社会恐怖症状測定尺度 の開発—回避行動と認知症状の測定—

福原 佑佳子

〈目的〉

社会恐怖は、恥ずかしい思いをするかもしれない社会的場面に対する顕著で持続的な恐怖を特徴とし、精神疾患の中では3番目に有病率が高い。社会恐怖の特徴的な症状として、恐れを感じている場面を避ける（回避行動）、不安が他者に気づかれているのではないかと過剰に心配する（認知症状）、発汗や手足のふるえ（身体症状）などがあげられる。わが国では、児童・青年期の社会恐怖をスクリーニングする尺度に、日本語版Social phobia and Anxiety Inventory for Children (SPAI-C)があるが、日本語版SPAI-Cでは回避行動と認知症状を測定できず、児童・青年期の社会恐怖症状を測定する尺度は不足していると考えられる。そこで本研究では、児童・青年期の社会恐怖の回避行動測定尺度として、日本語版Liebowitz Social Anxiety Scale for Children and Adolescents (日本語版LSAS-CA)と、認知症状測定尺度として、日本語版Social Anxiety Scale for Children-Revised (日本語版SASC-R; 児童用)、日本語版Social Anxiety Scale for Adolescents (日本語版SAS-A; 青年用)を作成した。

〈方法〉

対象者：小学校4・5・6年生826名（そのうち、2回目の調査協力者605名）、中学校1・2・3年生771名（そのうち、2回目の調査協力者413名）

調査材料：①日本語版SASC-R、②日本語版SAS-A、③日本語版LSAS-CA、④日本語版SPAI-C、⑤日本語版Spence Children's Anxiety Scale (日本語版SCAS) 小学生に対し、①、③、④、⑤に、中学生に対し、②、③、④、⑤に自記式で回答を求めた。

〈結果〉

確認的因子分析の結果、日本語版SASC-R、日本

語版SAS-Aともに、「友人からの否定的な評価に対する恐れ」8項目、「よく知らないような人々や状況に対する社会的回避とディストレス」6項目、「全般的な社会的回避行動とディストレス」4項目の合計18項目から成る3因子構造であり、原版と同様の因子構造であることが明らかにされた。

LSAS-CAに関しては、24の社会的状況に対して、恐怖と回避をそれぞれ求める形式になっている。これまで、原版のLSAS-CAでは因子分析が行われていない。そこで、本研究では、成人版LSASの先行研究に従い、確認的因子分析を行った。その結果、「対人交流場面での恐怖」、「パフォーマンス場面での恐怖」、「対人交流場面での回避」、「パフォーマンス場面での回避」の4因子構造であり、成人版と同様の因子構造であった。Cronbachの α 係数、および再検査信頼性を検討した結果、日本語版SASC-R、日本語版SAS-A、日本語版LSAS-CAは十分な信頼性を持つことが明らかにされた。妥当性を検討した結果、日本語版SASC-R ($\alpha=.65 \sim .88$; $r=.64 \sim .78$)、日本語版SAS-A ($\alpha=.72 \sim .90$; $r=.68 \sim .73$)、日本語版LSAS-CA (児童用 $\alpha=.83 \sim .95$; $r=.77 \sim .82$; 青年用 $\alpha=.83 \sim .96$; $r=.79 \sim .85$)は、SPAI-Cと日本語版SCASと中程度～強い正の相関にあることが明らかにされた。

〈考察〉

日本語版SASC-R、SAS-A、LSAS-CAは児童期・青年期の社会恐怖をアセスメントするのに有益である可能性が示唆された。社会恐怖に関しては、特に発症年齢よりも治療実施時期が遅れていることを考慮すると、日本語版SASC-R、SAS-A、LSAS-CAの作成によって、児童・青年期を対象とした社会恐怖症状のアセスメントが可能になったことは臨床的意義が大きいと考えられる。また、児童・青年期ともに同様の因子構造が明らかにされたことから、児童・青年期での社会恐怖症状の比較が可能となり、これまで明らかとされなかった児童・青年期それぞれに特有の社会恐怖症状の比較や発達の検討が可能になると考えられる。